毎　日　新　聞

岩倉、好機生かせず

第94回全国高校野球選手権大会の東・西東京大会（都高野連、朝日新聞社主催、毎日新聞社後援）は27日、神宮球場（新宿区）で東大会の準決勝2試合があった。国士舘が七回の好機に5安打を集中し、昨夏の優勝校の帝京を突き放した。成立学園は2年生の谷岡竜平投手が好投し、岩倉に反撃のすきを与えなかった。決勝は29日午後1時から同球場で行われ、国士舘は7年ぶり2回目、成立学園は初の夏の甲子園出場をかけて対戦する。28日は午後1時から西大会の決勝戦が同球場で行われる。【斎藤有香、平林由梨】

▽準決勝

岩倉	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
成立学園	0	0	0	0	0	2	0	3	X	5

成立学園は六回2死一、三塁で、失策と小柳の左前適時打などで2点を先制。八回には2死満塁で北原の右前適時打などで3点を加え、突き放した。主戦・谷岡は九回、渡部に本塁打を許したが、八回までを散発5安打の無失点に抑えた。岩倉は三回に2死一、三塁、四回は1死二、三塁の好機を迎えたが、適時打が出なかった。

カーブ狙い適時打

接戦を勝ち上がってきた成立学園は、岩倉に4点差をつけ快勝した。菅沢剛監督は岩倉の野球部出身で、母校との対決となったが「特に意識はせず、初戦から同じ気持ちで戦っていた」と話した。

小柳大樹捕手（3年）は六回、「相手が変化球でカウントを取る投手だ」と分析し、カーブを狙って左前適時打を放った。3打数3安打と好調だったが、決勝戦については「変に意識をせず、『8回戦』というつもりで戦いたい」と気を引き締めた。

3点を追加した八回2死二、三塁で打席に立ったのは、1年生で主軸を担う3番の岩成亮祐選手。二つ目の三振で、5打数1安打だった。「練習の成果が出し切れなかった。次こそ好機に打ちたい」と闘志を燃やしていた。

白球譜

フルスイングで一矢

岩倉
渡部 翔選手（3年）
＝久保玲撮影

レフトフライか。全力疾走で一塁ベースを回ったあたりで応援の三塁側スタンドの大歓声が聞こえた。「入ったんだ」。こわばった表情が緩み、笑顔に変わった。

しかし、本塁打の余韻を楽しむ余裕はなかった。生来のはにかみ屋。速度を落とさずダイヤモンドを一周しベンチに駆け込むと、磯口洋成監督に押し戻された。ようやく全員とハイタッチ。攻めあぐねてきた成立学園に一矢報いた。

「おい、バット振っとけよ」。監督に呼ばれたのは七回。追いつくためには5点が必要な最終回、先頭で起用された。思い切り振ることしか考えていなかった。3球目、内角高めの直球を強振すると、打球は弧を描いてレフトスタンドに吸い込まれた。高校通算3本目の本塁打になった。

腰を痛めて捕手を諦め、代打を極めると決めたのは1年生の頃。今大会は6試合中4試合で起用された。単打や死球で出塁したが長打は初めてだった。

しかしそれは、野球人生最後の打席でもあった。小2から始めた野球は高校で終わりにする。地元の台東区で居酒屋を開きたい。はにかみ屋でも人と接することが大好きだからだ。仲間が集い野球中継で盛り上がる。そんな店を切り盛りする。それが、次の夢になった。【平林由梨】

	岩倉	打	安	点
⑧	市川	3	0	0
④	安達	4	2	0
②	竹中	4	0	0
⑨	関本	3	1	0
①3	秋月	3	0	0
⑤	駒場	3	0	0
H	渡部	1	1	1
⑦	小串	4	2	0
③	尾関	1	0	0
1	田村	0	0	0
H	秋田	1	0	0
1	金城	0	0	0
H	辻本	1	0	0
⑥	酒井	2	0	0
H	佐藤	1	0	0
	計	31	6	1

	成立学園	打	安	点
⑧	北原	4	1	2
④	見目	4	0	0
⑥	岩成	5	1	0
③	篠崎	3	0	0
⑨	木村	3	0	0
⑤	鈴村	2	0	0
⑦	斎藤	4	1	0
①	谷岡	1	0	0
②	小柳	3	3	1
	計	29	6	3

	振	球	犠	盗	失	残	併
岩	8	3	2	3	1	8	0
成	6	9	1	0	1	10	1

投手	回	安	責
秋月	5⅔	5	0
田村	⅓	0	0
金城	2	1	3
谷岡	9	6	1

▽本塁打　渡部▽暴投　金城2▽2時間5分